

偽レクイエム

エドアルド・オツキオネーロ

其の一

私は洪水に見舞われた村、アリヤーテへ帰っていた。
ロマネスク様式の、聖ペテロと聖パウロのバシリカ、
そして洗礼堂。新改修された洗礼堂！

「故郷に帰るきみよ」と、私は反省し、
私自身に向き合った「故郷へ帰るきみよ、帰路に恨み抱きながら」

かつては川端にオリーブの木があり、

ニセアカシアの木、

草群。

川はランブロ川で、マンゾーニ風の喚起を、
かねてより崇高なり澄みきった流れ、ギリシャ語を語源とするその名。その
後、工場の時代がやってきた」と言われ、とはいえ、その前に紡績工場の黄
金時代もあった。

私は帰ってきた、二〇四二年一月の洪水に襲われたふるさとへ。
空気はまだ湿っており、粒子状物質で毒に、
樹脂のような匂いが漂う。

防水壁は耐えられず、水に家々、橋が食い荒らされた。
氾濫した川が遊び場を壊し、サッカー場を押し流し、
犬たちは濁り濁った茶色の濁流に攫われて

い

っ

た。

「雨も増水も慣れたもんよ。四〇年前も、二七年も三五年もあったさ。だが、今回はマジで想像を絶してたぜ」

と、一九七三年生まれのエジディオ氏が語る。

家具職人の数少ない生存者として。

すなわち伝統と地元会社を守れ、

などと地方紙の好みによる描かれ癖において。

川と同一平面の村の土地は、今やすっかり水底に沈んでしまった。

その水は三〜四キロにも広がってくる。

やく海拔二三〇メートルで走るムリーニ通り沿いに延び、

モリーノ・フィロ、

モリーノ・レジカ、

カラータ・ブリアンツアの墓地へ

と続く大通りまで。

「三階の窓際からは、

コイヤチャブが見えるだろう」と夢見るのは

八歳のミケーレ。

彼の無意識は鐘楼の上を跨ぎ、ダンススクールの屋根をびよん

びよん跳びながらツホブネという舟に出帆していた、

空へ。

「すべてが水に飲まれちゃった。家具が、

カーグが……。」と、嘆くロザルバ婦人。

可哀想。

数年前なら「一生のための犠牲だった」と言えたはずだ。

ただし、今や何人とも一身投げうたない――

反復される喪失の意識でいえば犠牲は無駄です。

戦後の時代、

北米関税、

縮小された航空空間、

思考停止。

其の二

私はこの草原を歩き出した。川の流れがようやく回復し、そこに広がるのは消耗した草原だった。

まるで「故郷の鎮魂歌」そのものだ、と言われるかもしれない。

郷愁の 膨大な枕元 又は病床。

私は歩みを導く—— 榆の木へ

イラクサへ

色あせたチャイブへ。 むき出しの根っ子。

氾濫は斜面を浸し、斜面は崩れ落ちそうに、落ちた。

落ちてきたラダエツリ家の屋敷、モツタ家の屋敷……。

「家庭の皆、破滅に」そう言い足されるかもしれぬ。

に縛られた亡き体、風糸のように張り詰めたもの、
せり上がる水の底から浮かび上がる

口々、

泡、

コイ科魚の巣作り用の柴の束となった脚。

黴に充ち、廃棄すべき家々。

埃の飾りが振り、放置された家並み。

剥がれた幅木。

壁上には氾濫の影が刷られ、消えた子供たちの丈が測られる。

まっすぐ立った背中。 蒸発した背中。

子供部屋、

敷布、

枕、

人形、

タブレット、

鉄道模型。

(クチズサム)

「春は二重に 巻いた帯

三重に巻いても 余る秋

昔々、おばあさんたちのおばあさんたちが歌った――

「見えぬ心を 照らしておくれ

ひとりぼっちに しないでおくれ

いったい誰のために歌っていたのかい。

誰もいない、氾濫した村に。

口を利くのは、軋む垂木

衝撃を暗記した窓

釘。

ただし窓は叫びながら、記憶を巻き戻していく。

(コダマ)

「ひとりぼっちに しないでおくれ

ならば、言葉を巻き直し、もう再び着手するほかはない。

其の四

翌朝、私は谷底平野へと降りていく。

聖別を解除された教会の脇、

アリアーテへと続く大階段を下り、

川の曲がり角へ――

そこには「メタルカルプ」工場の跡地が。
コンクリートの骸骨、

排水管、

ハロゲンラン

プ、

ヨウキヅタが蔓る壁。

すでにかつての工場を治める廃棄、

無生物、

芽の首の

腐敗。

「魚たちは？」と私は思い——「電柱の先端まで届いた水位には魚たちが遊泳し、この流れに刻まれた地名の上を漂い、歩道となった水たまりで跳ね回っていたのだろうか。」

泥は潤沢で、乾燥の適度。

マウロ氏の顔も又、乾燥の適度（死後硬直）——

戸棚の下で見つけた彼は、救出が遅れたせい。

「夜ながらも、うちらを助けに来てくれたのよ」とルイーザ婦人は断言する。

「お陰様で。だって、うちの母はね、歩けなかったもん。うちらは市立小学校の体育館に運ばれたわ。」

消防士たちは、

その間にも、

避難させ、

支援し、

撤去し、

指示を出し、

復旧し、

水に引っ張っていかれたピアノで

一曲奏でながら

すでに災厄で

大げさに嘆く人々を慰めた、

排水ポンプを運び、

作動させ、

汲み出して、

そしてタンク車でよそに持ち出した。

水が粛清した後の残存物には、

溝もあり、

凹凸もあった。

それは永く水に浸けられた手指の

皸のように、——あゝ、村そのものゝ皸よ！

「チガロット」(大きなビー玉ごとき、すなわち腹の膨らみから)あるいは「カチャバル」(妄りに喋る者から)とあだ名づけられたエツトレ氏は、こう言いふらしていた。そのうちヘリがやってきて、どこでも消石灰を撒くだろうさ、瓦礫を固めて運びやすくして、病気を消毒して、浄化するってな。ピエスプレット(小さなシラミ)でいっぱいになった鶏小屋みたいにさ、ちようど、春ごとに鶏小屋に消石灰を撒くみたいに、とのことである。

パネルの上に、割れた瓦の上に、

そしてうなじの上に——散らばり

散らばった消石灰。